お父さん・お母さんに伝えたい

子どもの心に出会えるいい話

全国私立幼稚園若手設置者園長交流会（編）

突然のコースアウト

武蔵野東第一・第二幼稚園
加藤篤彦

澄み切った青空のもと、「よーいドン！」と掛け声が響くと、高揚した第一走者の子どもたちが一斉に走り出しました。一瞬の緊張が一気にはじけて、ワーッという声が応援席にわき上がります。ご両親も、おじい様やおばあ様も、まるで園児と一緒に走っているかのように手に汗にぎり、声もからさんばかりの応援です。

この年長クラス全員リレーは、だれもが興奮するにぎやかな競技。幼いながらも抜きつ抜かれつの白熱した展開に、みんな目が離せません。担任の先生たちは裏方役。練習のときには、子どもたちが順番を間違えないかとか、バトンをちゃんと渡せるかなど、心配が尽きなかったのですが、この日は順調な滑り出しでした。

「がんばってー！　こっちよー！」

バトンゾーンで待っている気が気でない担任の声に向かって、一位の園児が走り込ん

できました。そして自閉的傾向のあるA君にバトンタッチ。

「さあ、がんばってね」

と元気づけて送り出すと、すぐ後から二位、三位の子どもたちが、次々にA君を追いかけていきます。A君は普段からリレーごっこに興味があり、ルールも理解できている様子で友だちと走って遊んでいましたから、私も担任もそんなに心配はしていませんでした。

ところが、運動会当日は、まわりの応援や熱気がいつもの幼稚園生活とあまりにも違っていたので、びっくりしたのでしょう。バトンを受け取ると、途中から、応援をしているお母さんのほうに向かって、コースを外れて走り出したのです。

自分に向かってくると気づいたお母さんは、

「あっちょー！　あっちー！」

と大きな身振りでインコースを示しましたが、A君はお母さんの所へどんどん近寄ってきます。その間にA君の横を二位以下の友だちが次々と駆け抜けていきました。

突然のコースアウト、そして次々と下がる順位に、応援席の間からはだれとはなく、「アー」とため息がもれました。A君がコースに戻ったときには、お母さんはがっくりとした様子でした。

結局、A君のクラスは、その後の子どもたちの精一杯の力走も実らず、順位を盛り返すことができないまま最下位となりました。応援席では、「あそこでね……」という声もあったのだとか……。

その日の職員反省会で、A君のクラスの若い担任の先生が、こんな話を皆にしはじめました。

「実はリレーで一位になろうって、子どもたちと練習に励んできたんです。だからA君がコースを大きく外れた時は、私はもうダメだなと思いました。ところが、A君の後の子どもたちは、もう絶対に一位になれないほど離れているのに一生懸命走っているんです。もしそれが私なら、一位になれないと思ったら、あんなに力一杯は走れなかったかもしれません。なのに、次の子もまた次の子も、だれも力を抜かずに、それどころか、いつもよりもっと一生懸命に走っているんです。走り終わっても、まだずーっと応援しているんです。A君も一緒になって……。そんな様子を見ていたら、子どもは、すばらしいって思って……」

そのときの様子を思い出したのでしょう。担任は涙を浮かべていました。

運動会の終わりに「一位にはならなかったけれど、先生はもっとうれしかったの。ほ

んとうにありがとう。楽しかったよね。またやろうね」と、クラスの子どもたちに話したら、みんな「またやろう！」「今度はもっと速く走れるよ！」って、大喜びだったそうです。

最下位になったことをだれかのせいにするのではなく、足の速い子も遅い子もそれぞれが自分の力を出し切り、それを精一杯に応援し、個性を認めて互いに補い合う子どもたちの姿。それは、「順位や結果」という目に見える尺度にとらわれていては見えないものです。

この日、多くの人たちは、同じ場面を見てそれぞれにどんな思いを抱いたのでしょう。私は、思いのもちようによって、子どもたちの姿が今までとは全く違って見えてくることを実感するとともに、普段の子どもの生活からもっと多くのことを学べるのだということをあらためて思いなおしたのです。